

4

20周年記念祝賀会

2015年11月21日(土)に開催された祝賀会報告

芸術工学部20周年記念祝賀会 シンポジウム「芸術工学部の20年とこれから」

20周年記念事業で開催した祝賀会では、シンポジウムとパーティを開催。
シンポジウムでは卒業生の現在の活躍の一端を知り、
学部創設に携わった先生方の思いを再認識することができました。

シンポジウム 概要

日 時：2015年11月21日(土)13:30～16:00(13:00開場)

場 所：芸術工学部北千種キャンパス 図書館上大講堂

参加者：約250名

- 実行委員長挨拶 鈴木賢一先生
- 来賓挨拶 名古屋市総務局企画部長 馬淵幸男様
- 第1部：芸工オーブントーク20th特別版「芸術工学と社会」
7名の卒業生・修了生が芸術工学部で学んだことや
これまでのキャリア等を語りました。
- 大学理事長挨拶 郡健二郎先生
- 第2部：パネルディスカッション「芸術工学部の20年とこれから」
学部創設に尽力された3名の名誉教授が当時の思いやこれからの展望などを語り合いました。
登壇者／柳澤忠名誉教授、川崎和男名誉教授、森島紘名誉教授 司会／横山清子先生
- 総 括 芸術工学研究科長・20周年記念事業実行委員長 鈴木賢一先生



名古屋市総務局企画部長 馬淵様



実行委員長 鈴木先生



上中／総司会 水野みか子先生 上右／第1部司会 自治会長 池田夏生さん 下右／大学理事長 郡先生

芸工オーブントーク
20th特別版

1

名古屋大学未来社会創造機構
研究員

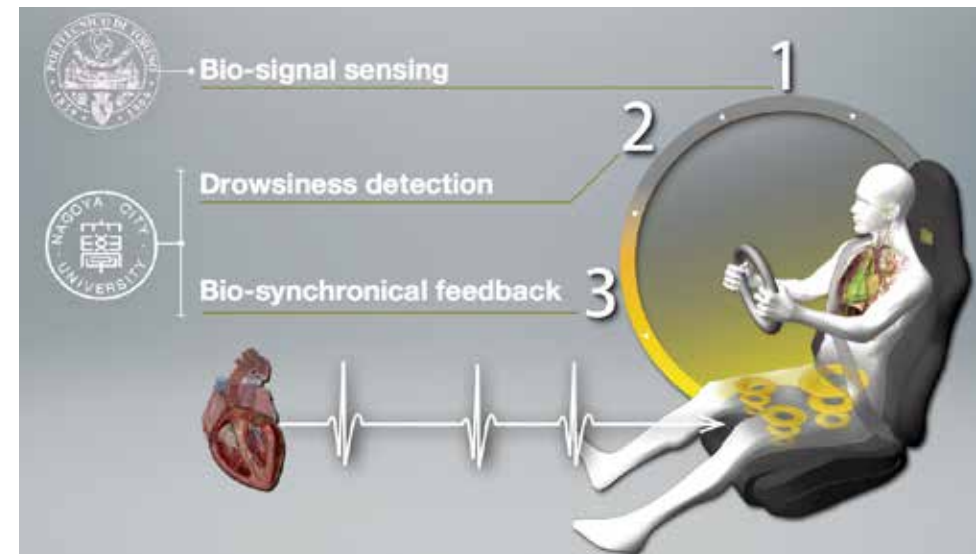
10期生／
高橋 一誠

デザイン情報学科 横山研究室 卒業
芸術工学研究科 修士・博士課程同研究室 修了

2015年、名古屋市立大学大学院芸術工学研究科と伊トリノ工科大学にて博士号を取得。現在は名古屋大学未来社会創造機構にて、自動車運転時の体調異常対応システムの研究開発に従事。

トリノ工科大学でも 研究を行う

芸術工学部には2005年に入学し、それから博士課程まで10年間在籍しましたので、ようやく2015年にすべての課程を修了しました。博士論文は芸工とトリノ工科大学(姉妹提携校)との共同プロジェクトで行い、居眠り運転防止システムについて研究しました。生体信号センサから得られる信号によってドライバーの状態を推定し、危険な運転に至る前に眠気を緩和させる刺激を与えることで事故を防止するというものです。トリノ工科大学ではおもに生体信号センサの開発を、芸工では眠気検出と眠気緩和刺激の開発を行いました。



博士論文研究で開発した居眠り運転防止システムの概要。1のセンサ開発部分をトリノ工科大学で実施し、2と3の眠気検出と眠気緩和刺激の開発を芸工で行う。



社会に貢献する技術開発を

芸工で学んだ知識や技術を活かし、現在は名古屋大学の未来社会創造機構の研究員となって自動車の安全技術に関する研究をしています。具体的には心疾患やてんかん等の病気をもつドライバーが安心して運転できるような、

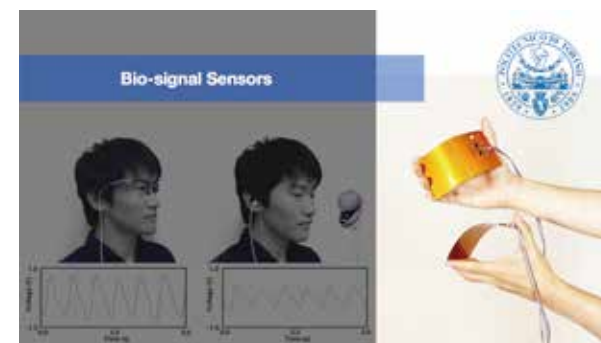
体調異常による危険な運転を防止できるシステム開発を目指しています。

映像でお見せしているのはその実験車で、ハンドルを握るだけで心電図や脈波、血圧を計測できるセンサや、ドライバーの姿勢の崩れを検出できるカメラなどを搭載しています。こうした生体信号と姿勢の崩れから体調不良や運転時の突然死等を検出して、ドライバーに呼びかけて注意をうながしたり、それに応じなければ自動運転に切り替えたりして、安全に車両を停止させます。まだ始まったばかりのプロジェクトで、私は生体信号計測と異常信号検出方法の開発を担当しています。

かけ出しの研究者ではありますが、芸工での学びをベースに研究を続け、少しでも社会に貢献したいと考えています。



心発作時の生体信号を用いた自動車両停車実験の様子
左下／心発作時の心電図と脈波の様子
右上／実験車両の外観 右下／実験車両内の様子



トリノ工科大学で開発した生体センサ
左／メガネ型パルスオキシメトリ 中／イヤホン型パルスオキシメトリ
右／静電容量型心電計

芸工オープントーク 20th特別版

株式会社山下設計
意匠設計

9期生／
酒井 千草

生活環境デザイン学科 久野研究室 卒業
芸術工学研究科 修士課程 同研究室 修了

2010年、芸術工学研究科久野紀光研究室を修了し、株式会社山下設計に入社。これまで市庁舎やオフィス、病院、介護施設や保育所などの企画、設計、設計監理を担当。

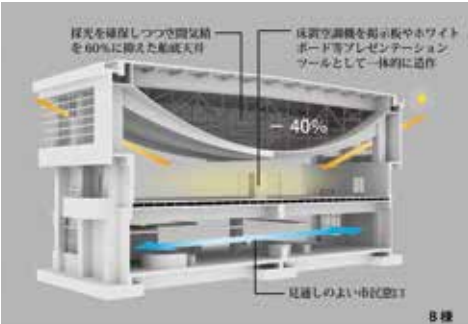
廃校体育館から市庁舎への
リノベーションプロジェクト

芸術工学部では久野研究室で制作や論文に取り組みました。大学院も芸工で進学をし、修了後は山下設計に入社しました。そこでの仕事から1つ、廃校になった高校の体育館を使って市役所につくり直すという一風変わったリノベーションのプロジェクトをご紹介します。

富山県氷見市の旧市庁舎は、老朽化による安全性や市民サービスの低下が問題となっていました。今回新庁舎として改修された高校には、北陸特有の不安定な気候に対応するため、2棟の体育館があり、1階にはテニスコートや弓道場が、2階にはそれぞれ屋内運動場がありました。柱の少ない大きな空間や運動を想定した耐荷重が高い床、また、法規で求められる積雪荷重以上に余裕を持って設計されていた屋根は計画の自由度を高めるメリットでした。一方、天井の高い空間であるため



左／オープンコミュニケーションスペースが点在する企画系執務室
右／既存建物を生かし、快適な執務空間をつくる改修の考え方(旧体育館)



左／既存建物を生かし、快適な執務空間をつくる改修の考え方(旧体育館)



船底型の膜天井を設けた企画系執務室(旧屋内運動場)[撮影／スタジオ・ムライ]

空調効率が悪いというデメリットもありました。

既存の空間を生かした
オープンなオフィスを実現

まず1階のスペースは、市民の窓口や地域の人々が使う会議室などを集約し、市民がアクセスしやすい計画としました。見通しが良く、窓口が1フロアにまとまっているため、どこに行けばよいかがすぐにわかります。続いて2階には行政の中枢機能となる企画関係の執務スペースを配置しました。

2階には空間の気積を少なくして空調効率を上げるための船底形の模天井を設けました。氷見市はブリが有名なので、ブリのお腹に見立てて「ブリ天井」と呼んでいましたが、いつの間にか市民の皆さんや職員の方たちから「船底天井」という愛称で呼んでいただき、氷見市が未来に向かって進んでいくと

いうコンセプトを付け加えていただきました。この形にすることで上部窓からの採光と通風、周囲の里山の緑といった眺望も確保しています。

2階は平面的に大きな空間であるため中央部に床置き空調機を置く必要がありました。当初は邪魔なのでなんとかせないかという議論もありましたが、空調機をホワイトボードやスクリーンなどで囲んでプレゼンテーションツールとして使えるよう造作しました。今では職員の方々が自主的な勉強会を行ったり、視察に来た方にレクチャーをしてもらうなど、コミュニケーションの場として活用されています。また、オフィス内や会議室は完全に閉じずに、オープンなしつらえにしました。実際に、課をまたいでの議論がしやすくなった、会議の音が周りに聞こえて話し合っている内容を共有しやすくなったとの声を頂いており、体育館の空間を生かした氷見市らしいクリエイティブオフィスを実現できたかと思います。



芸工オープントーク 20th特別版

medicala(メヂカラ)
代表・デザイン・施工

8期生／
東野 唯史

生活環境デザイン学科
三上研究室 卒業

medicala代表。株式会社博展に勤務後、2010年から世界一周の旅に出る。帰国して2011年よりフリーランスデザイナーとして活動開始。2014年より妻カナコとともにmedicala設立、デザインや施工などを担当。「いい空間」をつくるために施主や友人を巻き込みながらの空間づくりに挑戦している。代表作は「Nui. HOSTEL & BAR LOUNGE」(東京都 蔵前)。

全国各地での空間づくり

現在はフリーランスのデザイナーになり、長野県の下諏訪町に住んでいます。卒業後、最初は展示会のブースデザインなどを手がける東京の会社で空間デザイン職を3年ほどしていました。独立したのは退職して世界一周旅行に出かけたあとです。

最初に手がけた大きな仕事が、東京の蔵前にある「Nui. HOSTEL & BAR LOUNGE」です。6階建ての元倉庫をコンバージョンして延床1000平米弱で100人泊まれるホステルにしました。それから東京でカフェ、豊田市で蕎麦屋さん、山口県萩市では「ruco」というゲストハウスをつくりました。他にも長野県下諏訪町や大分県竹田市、宮城県気仙沼市などで店舗や住宅をつくってきました。今は鎌倉で6部屋の小さなホテルをつくっています。



「Nui.」のときのプロジェクトメンバー 施主、職人、デザイナーが一体となってつくりあげた

現場で生活しながら
ハードとソフトを両立させる

僕らはただデザインするだけではなく、もっと踏み込んでいい空間をつくりたいと思っています。そこで現場に泊まり、図面も現場で描き、現場でご飯をつくって大工さんや仲間と一緒に食べるという生活をしています。平面図だけで着工していて、その平面図も変更する可能性があることをオーナーの方に理解いただいています。

いい空間とは何なのか、理由をずっと探していましたが、ハードとソフトが両立していることだと気づいてきました。ハードは意匠や造作に関わること、ソフトは運営、例えばその店の運営方針やスタッフへの教育などです。この両方へのアプローチのために、借り暮らし・デザイン・施工・施主の施工参加・コンセプトワーク・廃材利用・地元食材・ひとてま——などのキーワードを挙げて取り組んでいます。

萩市の「ruco」は本当にいい空間になりました。だからこそ周囲にいいお店が集まってきて、遠方からもさまざまな人が来るようになりました。また地元作家のものを買うなど萩に住む人々の意識も変わってきました。僕らがつくる一つの空間は小さいですが、いいものがその空間の中にとどまらずにまわりに派生していくことで、まち全体が次のステージに進む。そう考えて、一つひとつ「いい空間」をつくっています。



上／施工はDIYで出来る部分を積極的にデザインに取り入れてみんなで作業すること多い中／山口県萩市につくったゲストハウス「ruco」
下／長野県下諏訪町に2014年につくった「マサヤゲストハウス」



大分県竹田市に2014年につくった
イタリアンレストラン「Osteria e Bar RecaD」

芸工オーブントーク
20th特別版

4

ソニー株式会社
新規事業商品企画

6期生／
伊藤 景司

視覚情報デザイン学科
森島研究室 卒業

名古屋大学大学院に進学し、在学中にJICAインターンでカンボジアに1年滞在、国際開発学の研究に従事。現在はソニー株式会社で、TS事業準備室という社長直下のチームに所属して、Life Space UXというコンセプトのもと、空間の魅力を最大限に引き出すための新規事業・商品開発に携わる。ソニー在籍中に公募留学制度に合格し、米国ミシガン大学に留学、MBA取得。

芸工生活が
キャリアの原点

森島研究室でデザインを学んだことは今のキャリアに大きな影響を与えています。特にNPO「バナナグリーンゴルドプロジェクト」への参画を通し、途上国の社会問題の解決というテーマにとっても共感し、人生を変えるほどのきっかけとなりました。

卒業制作では資源の枯渇について問題提起するために、サイの糞から紙、そしてポスターをつくり、普段必要としないゴミのようなものが、美しい紙、つまり有用な資源になることを訴えました。

そして、デザイナーではなく社会問題の解決に関わりたと思ったので、国



左上／まるで誰かが目の前で歌っているかのような錯覚。有機ガラス管が奏でる透明感のある音色で、部屋中を満たす不思議なスピーカー
左下／住空間に自然になじむ素材感とたたずまい



際開発研究科のある名古屋大学大学院に進学しました。在学中に約1年、JICA(国際協力機構)を通じてカンボジアに滞在しました。

その後、自分自身が主体者になって何かを解決する方向に進みたく、日本に本社を持つグローバル企業である、ソニーに進路を決めました。

新しいコンセプトの
商品開発や
新規事業に携わる

ソニーで最初はルート営業・海外マーケティングなどに携わり、社内留学制度でMBAを取得する機会を得て米国

のミシガン大学に留学し、経営、起業や、イノベーションなどを意欲的に学びました。

現在は「Life Space UX」という、既存の空間に何かを足すことなく、素晴らしい体験の創出を目指すというコンセプトのもと、新しい商品を企画する仕事をしています。例えばいま携わっている「グラスサウンドスピーカー」は、一見するとスピーカーに見えないたたずまいですが、有機ガラスの部分から透きとおるような音が全方向に広がり、極上のリラクセス空間を生み出します。コンセプトもさることながら、技術的なハードルや、音響・デザイン面での新しい挑戦を通して、やっと形になった商品です。

どんな新しい事業や商品も、必ずしも成功するとは限りません。重要なのは、失敗から学ぶこと、そして、成功確率をどうやったら高められるのか？ということだと考えています。現在は、その手法の開発もテーマにしながら新しいものをどんどん作っていかようと思っています。

透きとおるような音色で部屋中を満たし、リラクセス空間をつくるグラスサウンドスピーカー

芸工オーブントーク
20th特別版

5

日産自動車株式会社
カーデザイナー

4期生／
清水 暁生

生活環境デザイン学科 川崎研究室 卒業
芸術工学研究科 修士課程 同研究室 修了

日産自動車株式会社カーデザイナー。入社後はエクステリアデザイナーとして「ESSENCE CONCEPT」や「Q30」に参画。2012年から2年間仏ルノーデザインに出向し、レースカー「R.S.01」を手がけた。日産帰任後はCreative Lead Designerとしてインフィニティブランドのデザイン開発を担当している。

カーデザイナーの基礎は
芸術工学部での学び

車のデザインとは、正に芸術と工学が融合したものです。在学中は芸術と工学の基本と、多種多様な専門領域の先生や仲間から考え方の違いを学びましたが、それは日産自動車でもカーデザイナーを10年間担当してきた私のベースになっています。

「Car designer should be smart, but also be egoistic.」カーデザイナーは、スマートであると同時にエゴイストであるべきだと思っています。

カーデザイナーという仕事はチームで行います。エクステリアやインテリア、カラーやグラフィックなどのデザイナー、モデラー、エンジニア、プランナーなど多くの人々が関わります。その中で私が担当しているエクステリアデザインは、スケッチでその車のあるべき姿を最初に描き出す、いわばスターターの役割を担う仕事です。プロジェクトが始まり、スケッチコンペに勝つと、年令や国籍を問わずにリーダーとなり、自らイニシアチブを取り、冒頭で触れた芸術と工学について徹底的にこだわりながらチームをリードして行きます。

一方で、プロジェクトはデザイナーが最



上／INFINITI Q30
中上／INFINITI Essence
concept design team
中下／Renault Sport R.S.01
下／Renault Sport R.S.01
sketch



初に描いた一本のラインから始まりますから、一人で描くアイデアスケッチはデザイナーにとって最も大事な仕事であるとも言えます。そこでは、エゴイスティックなまでに納得が行くまで作業をします。そうでなければ勝が残って、車が完成して走るところまでは到底たどり着けない世界です。ですから、あるときは彫刻家のように形にこだわり、あるときは技術者の

ように機能にこだわり、あるときは写真家のように最高にカッコいいアングルを探し求めて、それをスケッチにします。

大学で与えられる様々な課題に真剣に取り組んで行けば、芸術と工学の基礎は自ずと皆さんの体の中に染みつきます。その経験を信じて、それぞれが持つ夢に向かって大胆にチャレンジして行ってください。

芸工オープントーク
20th特別版

株式会社マクロミル
マーケティング・リサーチ

3期生／
横田 理恵子

視覚情報デザイン学科
伊藤研究室・川崎研究室 卒業

名古屋生まれ名古屋育ち。芸術工学部卒業後、ソフトバンクパブリッシング株式会社（現SBクリエイティブ株式会社）に就職し、月刊誌の編集を担当。その後、ブランドデータバンク株式会社に転職し、現在は株式会社マクロミルにてマーケティング・リサーチの仕事に携わる。趣味は写真、ワイン、ゴルフ、朝活、国内旅行、役に立たない資格取得など。

ベンチャー創業期の
会社に転職

現在マクロミルというマーケティング・リサーチの会社に勤めています。私の職歴はデザインや建築といったものづくりの分野ではありませんが、芸術工学部から職業選択の可能性がさまざまにあることをお伝えしたいと思います。

学生時代に出版関連の会社でバイトをしたことから雑誌作りに興味があり、一社目はソフトバンクパブリッシングという出版社に就職して、ネット関連のマニアックな雑誌編集に携わりました。就職して数年は会社での自分の成長を感じ、仕事のおもしろさも感じる時期ですが、私は2年目に機会があってマーケティングコンサルに携わるブランドデータバンクという会社に転職しました。ベンチャー創業期の小さな会社で私が一人目の社員でしたので、営業、企画、デザイン、広報、総務、人事など、あらゆる業務を経験しました。芸工でも3期生ですが、そういった物事の立ち上げに関わることは楽しく、よい経験でした。

その後ブランドデータバンクがマクロミルの子会社となったため、そのまま転籍し、インターネットリサーチ事業に関わっています。



マクロミルの採用サイトには社員インタビューが掲載された

社会に関われることを
仕事以外にも求める

私が好きな『働きマン』（安野モヨコ作）という漫画に、「仕事しかない人生だったと思って死ぬのはご免だ」、「仕事したなあと思って死にたい」という異なる言葉が出てきます。以前はもしかしたら後者のようなバリバリ仕事をする人生がいいと思っていたかもしれませんが、しかし今はどちらでもないかなと思います。

この数年、ソーシャルデザインをやっている方などと知り合う機会が増え、社会との関わり方は仕事だけではないと思うようになりました。学生のときは就職先を決めることが最大の関心事になってしまいがちですが、例えば私はプロフィールに会社外での活動や趣味も書きました。そういった仕事以外の時間も充実させることが今とても楽しく、自分にプラスになっています。



現在はマクロミルでアンケート会員118万人を管理

芸工オープントーク
20th特別版

三菱重工業株式会社
システムエンジニア

1期生／
加藤 求

生活環境デザイン学科
青木研究室 卒業

東京大学大学院を修了して、2002年、富士ソフト株式会社に就職。2008年より三菱重工業株式会社に勤務。名古屋市および近郊の工場で、民間航空機(MRJ/Boeing787)に関する生産管理などの業務アプリケーション構築を担当している。

航空機を作るための
仕組みをITで支援

芸術工学部では「人工生命応用による建築施設設備の最適配置計画」というテーマの卒論を書きました。ここでみなさんに一つのプログラムをお見せしますが（点の集合体が画面内をまとまって移動するプログラムを表示）、これは一個一個の点に「周りの点との関係を考えながら動きましょ」という命令をしています。このプログラムのような人工生命の考え方を応用して、例えば「駅の改札をどう配置すると人の流れがなめらかになるか」などを考えました。卒業後は東京大学大学院に進学し、修論は「格子のねじれを利用した木格子螺旋状屋根の建設」という建築構造に関する論文を書きました。

建築分野を学んだあとに最初に就職したのはソフトウェア開発会社で、プログラム開発やプロジェクトマネジメントなどをしました。6年ほど働き、30歳のころに三菱重工に転職しました。発電プラントや輸送・設備関連などさまざまなものづくりをする会社ですが、現在私は民間航空機MRJ事業に関わる業務システム開発や運用という、社内IT部門に携わっています。MRJは先日初飛行について大きく報道されましたの



家族の誕生日で休みを取った日がMRJ初飛行の日(2015年11月11日)にあたり、小牧市内の公園から見学できた

でみなさんご存じかもしれません。こういった機会に仕事ができることはラッキーです。

その場その場で全力を尽くす

建築を学び、IT屋になって、今は飛行機を作るためにどういった仕組みで開発すると全体の業務がなめらかに進むか、利益が出るかといったことを考えています。こうした進路は一見するとつながりがなさそうですが、意外とつながっているなと思っています。芸工は一人一台パソコンを持つ方針だったので、AppleのPowerBookを買って初めてパソコンをさわりました。卒論ではITのおもしろさに気づき、修論も構造解析だったので、ソフトウェア方面に就職しました。

私自身は学生のころ、将来についてあまり考えることなく過ごしていましたが、もし今の自分が当時の自分にキャリアプランについて話すなら、遠い未来を考えて悩むよりも、その場その場で全力を尽くす。そして継続的に頑張る続けること。それが一番大事だと伝えたいと思います。





—— 本日は、芸術工学部の設立および発展にご尽力頂いた3名の名誉教授の先生方にお越しいただきました。まず、設立時および在籍時に、本学部教育研究に対して、どのような思いを抱いていらっしまったのかをお聞かせいただけますでしょうか。

柳澤 私 は建築を専門にしておりますが、実は、自分が建築学科に進学する際、工学部が芸大が非常に悩んだ末、工学部に進学しました。ご縁があって、この学部設立のお世話をすることになり、これはかつて自分が悩んだ、工学と芸術と両股かけたかたちで仕事ができそうだと、とても嬉しく思いました。神戸や九州に芸術工科大学ができ始めたころ、それらの大学では芸術工学をデザインの基礎学という言い方をされ

ていました。私は、もっと実用的なものを学ぶ学問を思い描いていましたので、健康とか都市景観とか、そうした共通の目的に対していろいろなデザインを集合するのが芸術工学だと考えていました。それが健康デザインであり都市景観デザインなのです。名市大の場合、医学部・薬学部・看護学部があり、健康のための学部がそろっている大学に芸術工学部ができたことが大事なのだ、とも思っていました。

私は病院建築を専門にしておりますので、真っ先にこのキャンパス校舎内にこれからの病室の実物大の模型をつくりました。4人部屋ですべてのベッドに窓があるというデザインでしたが、学生だけでなく医療関係者や一般市民の皆さまに見ていただき、感想を出してもらい、いろいろな形でディスカッション

をしました。これを芸術工学部の姿勢のひとつにしたいと、当時、思っていました。

川崎 僕は今も大学人をやっております、その始まりがここでした。僕が心臓を悪くして、もうデザイナーを辞めようと思っているときに、恩師から次に何をやるんだと問われ、今は3Dプリンタと言われていきますけど光造形システムですね、これをやりたい、そのために大学人になりたい、と答えました。すると、やっとお前はその気になったか、と言われました。その後、ここに来ることが決まり、毎月福井から通って、ときには柳澤先生とケンカしながら、気がつくとなデザイナー仲間旧知の森島先生も一緒になって、学部設立の準備から携わりました。設立後、博



「人々が健康に暮らすには、建築や都市や家具什器もそれなりのデザインが必要、それらの総合が健康デザイン」

柳澤 忠先生

平成7年芸術工学部設立準備委員長。平成8～11年度名古屋市立大学芸術工学部初代学部長。平成8年芸術学会理事。平成11年名古屋市立大学芸術工学棟が中部建築賞と照明学会奨励賞を受賞。平成12年ユニバーサルデザイン学生コンペ企画委員長・日本ファシリティマネジメント推進協会中部支部長。平成13年名古屋市立大学名誉教授。著書に『建築が病院を健院に変える』（彰国社）、『健康デザインー健康をサポートする環境づくり』（医歯薬出版）、『吉武泰水山脈の人々』（鹿島出版）、『設計力を育てる建築計画100選』（共立出版）がある。昭和39～平成6年名古屋大学教官。平成6年名古屋大学名誉教授。



士後期課程ができた段階で僕が大阪大学に移るまで、10年ここにおりました。

—— 教育や研究に対する思いもお聞かせいただけますか。

川崎 先ほど、研究室を卒業した清水君のスケッチとかを見ていて、思い出しました。僕の先生が「世の中に奇跡ってあるか」って問われたので、ありますよ、デザインで奇跡が起こせそうですと答えたと、ころ、「バカかお前は、教育で奇跡が起こせるんだ」と先生はおっしゃいました。何も知らない18の子が入ってきて、学んで学んで学んで、そして出ていくときには、何かしらの専門家になっていく。それが奇跡なのだと。ということでしょう、20年非常に速いなど改めて思いました。森島 私は長く民間の企業におりまし

て、ずっとデザイナーでいくつもりだったのですが、50歳になったとき、ふっと気がついて、このままでいいのだろうか。今までいろいろな方々から教わったことを誰かに伝えなきゃいけない、と思いました。もっと若い人たちに伝えられないか、そうだ大学があるじゃないか、ということで東京から通える大学に手紙を出したところ、柳澤先生からお誘いを受けました。

外から大学という世界に入り、その一般社会との違いに驚かされました。ある人は、大学人というのは非常識な人間の集まりだからね、とおっしゃっていて、ああそうかと。本来、会社であれば社長が目標を掲げたら、そこに向かって全員一丸となって進んでいくんですよ。ところがここはみんなバラバラ。これが大学というものか、と思ったのが最初の印象です。

—— 川崎先生が清水さんのお名前を出されましたが、その教育の奇跡、大学の教育の成果が今社会に出て活躍していらっしやる方々だと思います。芸術工学部というあまり例のない学部において、先生方がどういうビジョンで教育を実施なさったか、もう少しお話を聞かせてくださいますでしょうか。

柳澤 森島先生が、大学っていう世界はバラバラだとおっしゃいました。それは本当にそうで、よく考えましたら、工学部なんていうのは建築だとか電気、土木と、皆、方法で分かれているんですね。私は大学というものは、特に芸術工学部は、目的に向かっていろいろな専門が力を合わせるところであり、そういう空気をつくりたい、と思っていました。先ほど挙げた健康デザインを例



「教育で奇跡が起こせるんだ、と。何も知らない子が入ってきて何かしらの専門家になっていく、それが奇跡。」

川崎 和男先生

デザインディレクター・博士(医学)。大阪大学・名誉教授、名古屋市立大学・名誉教授。現在は大阪大学大学院医学系研究科にて危機解決産業創成デザイン重要拠点として、コンシリエンスデザイン看護工学寄附講座 特任教授。芸術工学部設立準備委員であり、平成8年から平成18年3月まで在籍。当時の担当教科は色彩論・製品デザイン論・プロダクトデザイン論など。また、学部から大学院博士前期後期課程の入試を担当。国内外での受賞歴多数。ニューヨーク近代美術館など海外の主要美術館に永久収蔵、永久展示多数。

にとれば、人々が健康に暮らすには、建築だけではなく都市や家具什器も、それなりのデザインが必要です。そういながらこの学部は建築や情報だとか方法で学科が分かれている。もし多くの賛同が得られるならば、これからの20年は健康デザイン学科のように目的別に学科を区分してこの学部を盛り上げていくといいのではないかと考えています。

森島 設立時は今よりも自由さがありましたね。当時を例えるなら、デパートの大食堂のようなもので、お寿司もあればラーメンやスパゲティもあり、いろいろなものを取って食べ比べながら、ひとときを過ごせる。そうやっていろいろな分野・手段を学ぶことによって、自分たちが今後どういうふうに生きるのか、その道を見つめることができる場所が、ここなのではないでしょうか。

この学部がどういう人材をつくり出しているかとしているのか。私が当初、柳澤先生から聞いたのは、バウハウスのな非常に芸術性の分かる工学の人たちを育成するんだ、という話でした。でも、今は、学科間の移動はできないし、交流も少ない。設立当初の理念からすると、もうこのベルリンの壁みたいなもの

は壊さなきゃいけない。もう古いですから壊していただいて、自由に行き来ができて、自由にカリキュラムが取れる学部にしてください。先ほど卒業生がすばらしいプレゼンテーションをしましたが、それによって、ああいう人材が育つと思うんですね。専門的なことを学びたいのであれば、美大か工学部へ行けばいいんです。ここでは、もっともっと広い視野を持った、国際的な視野を持つ人、そういう人が育ってくれるといいと思っています。

川崎 この学校が今、バラバラになっているという状況を外側から聞いていて、叱りに来たのを思い出しました。今、本当にデザインの世界は危ないんですよ。建築は建築、情報は情報で分かれているなんて、そんなことやっていたら、この学校はデザイナー労働者をつくる養成機関に終わってしまう。

なぜかと言うと、今、僕はコンシリエンスデザインっていうのを一生懸命やっています。東京大学が[i.school](※注)という教育プロジェクトをやっていますが、これはスタンフォード大学のデザインスクール[d.school](※注)を真似しているんです。そして、京都大学がインクルーシブデザインをやる中で、僕はコンシリ

エンスデザインという言葉で、デザイン思考を徹底的に分解しながら、この半年間ずっと頑張ってつくってきました。

自分はここで、柳澤先生や森島先生、他の先生からいろいろなことを教えられました。今後、学生が少なくなっていく中、学科間で分かれている場合ではない。絶対いっしょになるべきだ。僕は今日、それを言いに来たんですよ。

柳澤 川崎先生が医学博士でいらっしゃることを、皆さんご存知だと思います。芸術工学部に在籍されているときに医学の分野で博士号を取られたんです。当時は、ご本人もそのつもりではなかったかもしれないのですが、ある時思いついてお勧めしたんですね。この人工心臓の研究はどうしたって医学博士としておまとめになるべきだ、と。そこで、名市大の医学部をお願いして。医学部でも驚かれましたよ。突然、芸術工学部の先生の論文を博士として取り上げるなんて。なかなか大変なことだったと思います。かなりの大学の教員採用は学位を条件にすることが多いんですね。学位がないとなかなか大学の先生になれません。さっき、トリノ工科大学で学位を取ったという報告を聞いて、すばらしいなと思ったんです。

川崎医学博士の事例は、大学が人材の能力を見抜いた上で採用し、大学の持っている力で資格を獲得していただいた素晴らしい事例だと思います。人を創る名市大の総合力です。

森島 現状、大学院への進学者が減ってきている、と聞いています。学部生が今、何名ここにいらしているかわかりませんが、学部だけで社会へ

出て行っても、ほとんど役に立ちません。君たちが専門的知識を身につけたと思っていたとしても、社会で活躍している人たちから見ると、まだ赤子の仕事です。ぜひ、大学院で勉強してください。学部の4年間は大人になる準備期間ですね。そのときはできるだけアラカルトメニューでいろんなものを食べて試してみる。そして、その中からこれだ!という分野を見つけて大学院に進学

し、学び、社会に出ていけば、専門家として花開く。そう申し上げておきたい。

——最後に、これからの20年についておうかがいしようと思っていましたが、ちょうどそのお話をうかがうことができました。創立時の思いなど、私たちが継承しきれていないことを反省しないといけないと思いました。お忙しい中ご指導いただきありがとうございました。



(※注)i.school：イノベーション人材の育成を目的に2009年に設立された、東京大学知の構造化センターが主宰する教育プロジェクト。
d.school：Institute of Design at Stanford。スタンフォード大学内の学科横断型プログラムで、機械工学、コンピュータサイエンス、ビジネス、法律、文学など様々な選考の学生・教職員が集まり、デザイン思考を学びながら、分野を越えてイノベーションを生み出していく力を身につけていくというもの。



「いろいろな分野を学ぶことによって、自分の道を見つめることができるのが、ここ。学科間の壁はもう壊さなきゃいけない。」

森島 紘先生

名古屋市立大学名誉教授。芸術工学部設立準備委員、平成8年4月教授着任、平成21年3月定年退職、平成18・19年度研究科長。平成18年文科省現代GP採択プログラム「バナナ・ペーパーを利用した環境教育」の企画、取組責任者。「卓展」の企画、実施。平成20年「NAGOYA国際デザインワークショップ (IWASEDAN2008) の実行委員長を務めた。愛知万博に出席した「バナナペーパープロジェクト」のプロデューサー、研究成果に「愛・地球賞」、「グッドデザイン金賞」ほか。著書に『バナナ・ペーパー 持続する地球環境への提案』、(共に鹿島出版会)がある。



総括

20周年記念事業実行委員長・
芸術工学研究科長

鈴木賢一先生

先生方から、壁を超える学科をつくれとの、大きな宿題をいただいてしまって、戸惑っております。でも、こんなにも面白い話が聞けて、本当によかったと思っています。

今日、20年前の設立時のことをありありと思い出しました。あの頃、設立準備のために、随分と書類も作りました。柳澤先生から、芸術工学の芸術と工学が融合した絵を描きなさいと言われ、一生懸命描きました。今、考えると、そこからちっとも出ていないし、残念ながら分離の方に向かっているという指摘も受け、やっぱりこのままではいけないと思います。しかし、ほんとうに難しい問題がいっぱいあって、簡単にはいかない。先生方もバラバラです。ただ、今日も卒業生がデザイナー

はエゴイスティックとおっしゃっていましたが、いい意味でのエゴのかたまりがここにはたくさん集まっていて、だからこそ、こんなにもおもしろく飛び抜けた人材も育つのだと思います。

3人の先生方は、厳しい言い方をされましたけれど、いい言葉をたくさんいただきました。言葉の中に愛を感じました。冒頭で郡学長は愛学部精神だけではなく愛校心を、とおっしゃいました。僕も、医療など他分野の人や海外の人との交流など、そういうことがすごく大事だと思っています。

今日プレゼンをしてくれた7人の卒業生たちは、最先端のデザイナーだと強く思いました。もう僕が教えるよりも彼らの方がきっとおもしろい授業ができるのではないのでしょうか。入学当時は、幼い学生だと思っていた皆さんが、20年経つとこんなに立派になるんだと、ひしひしと感じました。本当にありがとうございました。

芸術工学部20周年記念祝賀会 交流会(パーティー)

シンポジウムに引き続き開催された交流会では、多くの参加者で芸工棟がにぎわい、なつかしい顔ぶれに笑顔がこぼれました。会場では、卒業生・修了生の仕事や作品の展示をしたほか、食事やドリンクの提供などでも卒業生や在校生の協力をいただき、関係者の交流の場となりました。

交流会概要

日 時：2015年11月21日(土) 17:00 ～

場 所：芸術工学部北千種キャンパス 芸工棟アトリウム

参加者：約250名(現役および退職された教職員、卒業生・修了生、在校生)

- 記念撮影
- 司会より開会挨拶 同窓会副会長 伊藤幸子
- 大学理事長挨拶 郡 健二郎先生
- 来賓挨拶 名誉教授 瀬口哲夫先生
名誉教授 嶋田勝彦先生
- 乾杯挨拶 名誉教授 奥山健二先生
- 歓談
- 閉会挨拶 同窓会会長 丸山勝也



同窓会会長 丸山さん



同窓会副会長 伊藤さん



左上／大学理事長 郡先生 右上／名誉教授 嶋田先生 左下／名誉教授 瀬口先生 右下／名誉教授 奥山先生





芸術工学部20周年記念祝賀会

出展者(敬称略、入学年次・50音順)

- 1期生 安藤大輔、謠口志保、高野真悟、寺嶋梨里
- 2期生 下山将宏、永利紀美子
- 3期生 加藤智幸、島麻絵
- 4期生 伊藤幸子、今泉力哉、清水暁生
- 5期生 森葉月
- 6期生 伊藤景司、橘佑季、寺井真理、西川正純
- 7期生 荒川真伍、河崎悠有、河瀬智文、小林祐、齊川義則、野口大輔、水谷夏樹
- 8期生 伊藤潤、竹内優、田中揚子、寺崎吉伸、守田真子
- 9期生 白川勝悟
- 10期生 田中江理
- 11期生 出口翔
- 鈴木研究室付属
ホスピタルアートチーム「はみんぐ」

協力者・関係者

- 料理・ドリンク／6期生 川合優一、大学生協、BAR部署の学生
- 会場構成・設営／4年生 坂田佳隆 ほか
- 記念品／11期生 出口翔
- スケッチ・撮影／8期生 守田真子、10期生 田中江理

記念品

- 『名古屋市立大学大学院芸術工学研究科紀要
芸術工学への誘い』
- オリジナル手ぬぐい

